

## 小説部門 講評

審査委員：小説家 里見蘭

この賞の第一回から小説部門の外部審査委員を務められた久美沙織先生が第五回をもってご勇退され、後任を拝命しました。

過去の受賞作品集に目を通していたので、本賞の水準の高さは知っているつもりでしたが、今回、応募作すべてを読んで、改めてその思いを強くした次第です。

入選作の候補となる六作品を絞り込むのは大変でした。金沢大学の内部審査委員の先生方と選考会で論議してこのたびの結果となりました。私が選んだ六作品がすべて入選したわけではありません。他の先生方の意見を聞いて評価を改めた作品もあります。

以下、入選した六作品について私の感想を。審査当時作者の名前は審査員には知らされておりましたので、ここでもタイトルのみ記します。

### 佳作『高嶺と花』

静岡県の、富士山が当たり前に見える場所で生まれ育った少し内気な主人公の女子と、高校入学を機に東京から移り住んできたらしい、きれいでおしゃれな女子との友情。憧れである東京の大学に進学したい主人公とは対照的に、静岡が好きだという友人は県内の大学への進学を希望している。友人の目を通じて、主人公が生まれ育った場所を見る目が少し変わってくる、という話。

等身大の感性と自然な文章、短い描写からでも伝わってくる主人公、友人、主人公の母親の人物造形は水準以上で、好感度も高い。ただラストが駆け足になってしまい、とってつけたように感じてしまった。制限枚数的にも余裕があったのだから、しっかり描いてほしかったという不満が残る。

### 佳作『裕子のレッスン』

主人公である六十歳の裕子が、幼い頃から父親らしいことをしてくれなかった、百歳になる父に隠されていたある事情を知り、彼を許し受け入れるという話。

細かいことかもしれないが、1963年生まれの裕子の母親が当時四十歳で初出産しているのが当然のように語られること（出典は省くが、1950年から1980年間に第一子を出産した母親のうち、四十歳以上は0.3パーセント）、1973年の時点で十歳の少年の「そいつは昔、戦争から逃げ帰った臆病者だがや。（中略）みんな知つとるでね」という台詞の、みんなが知っているなら（その少年と日頃接点がないとしても）主人公が知らなかったのは不自然ではという疑問等、作中の少なからぬ設定に違和感を覚えてしまった。もう少し時代と登場人物の年齢を変えた方がより説得力のある話になるのではないかと個人的には思う。

ただ、高校生として、自分とかけ離れた年齢の人物を主人公に、第二次大戦というモチーフに挑戦する意欲は素晴らしいし、誤解によってすれ違っていた相手を思う気持ちが、長い

年月を経てその誤解が解けることで相手に届き、すれ違いが氷解して心が通い合う、というテーマにしっかり取り組む作者の姿勢は好感が持てる。

#### 佳作『去りゆく季節』

舞台は、トロールやドワーフは登場するが、物語を志向するRPG的なそれとは異なるファンタジー世界。主人公の一人称により、季節の移り変わりや読んでいる本への考察、旅する友人との再会などのエピソードが綴られる。

いわば、作者がその世界の住人となりきって書いたエッセイのような小説であり、身も蓋もない言い方をしてしまえば、ファンタジー世界は作者の抒情的思弁が自由に展開される場として機能するようある意味都合よく設定されており、それ以上の奥行きはあまり感じられない。

にもかかわらず、そのように構築された世界は筆者にはとても魅力的に感じられた。作者が、自らが信じる美しさや善性といったものを自分なりの言葉で（抑制を含め）表現することに歓びを見出しつつ書いている姿が想起され、またそのスタイル（作家性）も好ましいと思えたからだ。個人的には、応募作中、書くことの歓び、が一番純粹に表れている作品だと感じた。それだけに、ラストでの自己発見が安直で性急、むしろ蛇足に思ってしまった。

#### 優秀賞『一人ぼっちの悪魔』

童話のような語り口のファンタジー作品。他の悪魔にさえおそれられる孤高の存在である悪魔が、人間の魂を奪うため降り立った地上で、一人の天涯孤独な少女に出会う。悪魔をおそれず逆になつく少女から、悪魔は魂を奪えない。ばかりか、歌が好きな少女に歌を教わる羽目に。悪魔は少女を歌姫のステージに出してやるが、直後、少女はすでに悪化していた病が原因で命を落としてしまう。その後、また一人になったが悪魔は歌を歌うことを続ける、という話。

粗削りである。誤字も少なくない。設定にも甘さはある。少女と悪魔のキャラクター造形もそこまでオリジナリティの高いものではないかもしれない。しかし、である。少女との出会いと別れを経た結果悪魔の心身に生じる変化と、クライマックスでの自己発見のダイナミックさ、つまり振れ幅は応募作中でも群を抜いていた。筆者はこの点を、物語の持つ魅力の一つと考える。

童話の語り口を生かしきり、短編ながらスケール感を備えた作品に仕上げた作者の力量も大いに評価できる。小説の主要なモチーフである歌と共鳴して、本作の文章もまた朗々と歌い上げるごとくに物語をつむいでゆく。作者はすでに堂々たるストーリーテラーであり、これからも書き続けてくれると信じる。

### 優秀賞『手をのばした先に』

主人公は演劇部に所属する高校生。周りに押される形で舞台監督となったものの、真面目で小心な主人公は、自分がその任にふさわしいという自信をずっと持てずにいたまま、ついに高校生活最後となる大舞台の本番を迎える。その舞台が残すところわずか三分というタイミングで、予定より進行が遅れ、このままでは失格となってしまう大ピンチを迎える。主人公はそこで、これまで自分を支えてくれた友人や、卒業した先輩が最後にくれた手紙にあった言葉を思い出し、自分や仲間を信じることで無事ピンチを乗り越え、舞台監督としての自信を得る、という話。

エンタテインメントとして形をなしている。冒頭のモノローグはやや蛇足だが、直後、まずタイムリミットありの緊迫した場面から入り、主人公がすぐ最大のピンチに陥って、そこで過去の場面のカットバックが挿入される——この辺りの、リーダビリティを意識した構成力、もそうだが、エンタテインメント作家としてのリズム感をすでに作者は身につけている。

人物造形や描写力も安定しており、読者を作品世界に引き込む力も持っている。おそらく本作で描かれる高校演劇は、作者にとって馴染みがある世界なのではないか。ディティール、つまり細部の描写も確かで、安心して読める。

ただし、本作にはわかりやすい弱点もある。ストーリーも、主人公に起こる変化も予定調和的であって、驚きに欠ける、という点だ。小説そのものがある意味優等生的にまとまってしまっている、と言い換えてもいい。

よくできている作品に対して「ウェルメイド」という（英語では）形容詞を用いることがあって、これはいい意味でも悪い意味でも使われる場合がある。後者は、たとえば、型にはまっていて突き抜けるような面白さに欠ける、というように。本作にもそのようなことが言えるかもしれない。

しかし、本作の「弱点」をあえて指摘したのは、本賞の水準がそれだけ高いことの証左でもある。作者が高校生であることを踏まえると、この水準でウェルメイドな小説を完成させられる力を持っているのは素晴らしいことだ。さらに、これは推測だが、作者はおそらく制限枚数ぎりぎりまで使いきり、しかし超過しないよう、くり返し推敲したのではないか。推敲する力は、作家にとって書く力と同じくらい重要な資質である。

筆者はあえて厳しいことも書いたが、作者には今後も、心のおもむくままに伸び伸びと小説を書き続けてほしい。きっとすごい作品が書けるはずだ。

### 最優秀賞『あかは、女の』

主人公は、自らのありのままの容姿を「醜い」と感じ、メイクをしていないすっぴんの自分を誰にも見られたくないと考える高校生女子。修学旅行先の美術館で、西洋絵画に描かれた女性たちを見ても、それが絵であると承知しつつ、ムダ毛を剃る必要などなさそうな体にならやましさを感じ、鬱屈する。さらに、目玉であるモナ・リザの絵画と向き合った際には

「美しさの奴隷」となった自分を意識させられてしまう。

宿泊先のホテルでは、クラスの中心的存在の一人で、モナ・リザを観たとき連想した美しい容姿の持ち主である女子と同室になる。彼女にすっぴんの自分を見られてしまった主人公は、「美醜の基準が身に染み」る以前に戻りたいと願いつつ、初日につけたお気に入りの赤い色のリップをやめ、翌日からは自分の肌に合ったオレンジのリップをつけるようになる。

修学旅行から帰った主人公は、クラスの男子の心ない言葉にムダ毛を意識しはじめた妹を手伝って処理するやり方を教え、そのとき、剃刀に負けた彼女の皮膚から流れる血の筋を見て、美醜の基準を意識し、それを自らに向けるようにした頃から、自分が「選ぶのではなく、望んで誰かに選ばれよう」とする「女になった」こと、妹が今まさに同じようにそうなるようとしていることを強く意識し、修学旅行先の美術館で観た絵画の中の女性たちもそうであったことに気づく。

だがその直後、メイクのやり方も教えてくれとねだる妹が持つ、ありのままの美しさに気づき、妹が「一辺倒な美しさの奴隷」にならないよう祈ると同時に、自らもそうした状態から抜け出す決意をして一步を踏み出す、という話。

審査会で、本作はほとんど文句なしに最優秀賞として選ばれた。筆者自身の評価もAだ。

確かな観察眼や鋭い洞察力に裏づけられた文章力、描写力のレベルがまず高い。一人称の語り手である主人公の人物もしっかり造形されている。

だが、この作品が応募作の中でも頭一つ抜けているのは、普遍的なテーマに真っ向から取り組み、小説として成立させた作者の作家としての手腕の力強さと、キレ味の鋭さが短い中でも存分に発揮されているところだろう。

女性が（主にはまず男性から）「見られる性」であることを意識しはじめ、自他を評価する中心的な基準が美醜という物差しになることは、選ぶ主体ではなく選ばれる客体であることを望んで受け入れるという構造を内包しており、それはわれわれが生きる今の社会において避けがたい現実である、という問題意識をこの小説は出発点にしている。

これは普遍的な問題だが、作者は主人公の人物造形、語りを通じて、一人の個人にとって切実な問題であることをまず読者にしっかりと体感させる。最初、主人公はこうした状態にある自分と葛藤している。美醜の基準に照らせば、自分は美しい側の人間ではないと信じているからだ。その基準に少しでも適応しようとムダ毛の処理やメイクに励んでいるが、心の底ではそうした基準に縛られる以前の自分に戻りたいと願っている。自分には似合わないが、ひと目惚れした赤いリップを唇につけるのは、そのささやかな抵抗のしるしだ。

だが、修学旅行先で観た西洋絵画の女性や、その頂点であり象徴であるモナ・リザに、また、ホテルで同室になった女子に、自らにはない美をつきつけられ、ふたたびその基準に屈し、赤いリップをやめ、無難なオレンジのリップをつけるようになる。

しかし、修学旅行後、これまでその基準から自由だった妹のムダ毛処理を手伝ったとき、同じ基準から逃れられない点で、美の頂点に位置するようなモナ・リザをはじめ、自分だけ

ではなく時代や国境を越えたすべての女性たちも同様に、選ばれる性としてのスティグマ（烙印）を負わされていたのだと気づく。

ここで、一人の個人にとっての切実な問題が、作中のイベントを契機として一気に普遍性へとつながっていく展開は小説として非常にダイナミックで鋭いキレ味も感じる。クライマックスとしての読み応え十分な場面である。作者がこの仕掛けを、効果を意識したうえで作中に組み込んでいるのは疑いない。

ありのままの女性と、見られる性としての女性の象徴として、それぞれ経血と、ムダ毛処理をした際に妹の脚から流れる血を対比させているが、これらは、主人公の主体性の象徴であるリップの色である赤とも響き合い、作品内に強力なイメージを作り上げ、小説のタイトルとも呼応する。

モナ・リザをフックにした仕掛けといい、こうしたシンボルの使い方といい、作者は高校生にしてすでにそうした高度な技巧を使いこなすたくらみを備えた作家なのだ。

ラスト。妹のメイクを手伝う際、そうして女性たちを支配する美の基準も、しょせんは「一辺倒な美しさ」を測る一つの物差しにすぎないのだと気づいた主人公は、その奴隷であることを自らもやめる決意をし、ふたたび赤いリップをつけ、過去に他者（おそらく親）から似合わないと言われて封印していた「ふりふりのワンピース」を買うため、妹と一緒に買い物に出る。

ここでの、自己発見から自らの主体性を取り戻すに至る変化の描写には、主人公を通じて作者の作家としてのしたたかさ、書き手としての骨太さが感じ取れ、頼もしい。

本作は応募作中、小説としての強度が抜きん出ている。もちろん技術的な側面もあるが、それを可能にしているのは、作者の現実、そして自分との向き合い方だろう。

本作の主人公が作者そのものであるかどうかはわからない。しかし、作者が、一人の個人と世界との間に、世界が、個人がありのままに生きようとするのを阻害する図式を見出し、それを小説として描こうとしたのは確かだろう。自らを取り巻く世界と自分との間にある対立関係、葛藤をテーマとした作品は他の応募作にも少なくなかったが、本作の作者ほどその葛藤としっかり向き合った書き手はいなかったように思う。

巨大な世界の前でちっぽけな個人は基本的に無力である。世界と個人との葛藤に向き合うのは、だからひどく消耗させられる営為だ。本作の作者は、そこから逃げず、徹底的にその葛藤を見極めてやろうと腹をくくり、さらに、小説を書く行為を通じて個人を押し潰そうとする世界と切り結び、そうした過程を経て、巨大な世界の圧力に屈しない個人を、つまり希望を描き出すことに成功した。

多くの審査委員の心を動かしたのは、作者の書き手としてのそうした胆力や覚悟なのではないかと筆者は考える。

長々と述べたが、本作は、さまざまな意味で超然文学賞の最優秀賞を受賞するにふさわしい作品であると断言できる。さらに言えば、本賞の今後の一つの指標となる作品だろう。

作者には今後もがんがん小説で暴れてほしい。